



一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは黄色の解答用紙に書きなさい。字数の指定のある問題は、句読点も一字と数えます。

久助君は、四年から五年になるとき、学術優等ヒンコウホウ
セイのほうびをもらってきた。

はじめて久助君がほうびをもらったので、電気会社の集金人であるお父さんは、ひじょうにいきごんで、それから、久助君が学校から帰ったらず、一時間勉強することに規則をきめてしまった。

久助君はこの規則を喜ばなかった。一時間たつて、家の外に出てみても、近所に友だちが遊んでいないことが多いので、そのたびに友だちをさがして歩かねばならなかったからである。

秋のからりと晴れた午後のこと、久助君は柱時計が三時半をしめすと、「ああできた。」と算術の教科書をぱたつとじ、机の前を立ちあがった。

そとに出るとまばゆいように明るい。だが、やれやれ、今日も仲間たちの声は聞こえない。久助君はお宮の森の方へ耳をすました。

森は久助君のところから注一三町ははなれていたが、久助君はそこに友だちが遊んでいるかどうかを、耳で知ることができたのだった。

だが、今日は、2森はしんとしていてうまい返事をしない。つぎに久助君は、はんたいの方の注二夜学校のあたりに向かって耳をすました。夜学校も三町ばかりへだたっている。だが、これもよい合図を送らない。

しかたがないので久助君は、彼らの集まっていそうな場所をさがしてまわることにした。もうこんなことが、なんどあつたかしれない。こんなことはほんとにいやだ。

さいしょ久助君は、宝蔵倉の前についてみた、多分の期待を持って。そこでよくみんなはキャッチボールをするから。しかししてみると、だれもない。そのはずだ、豆が庭いっぱいにほしてある。これじゃ何もして遊べない。

そのつぎに久助君は、北のお寺へいった。ほんとうはあまり気がすまなかつたのだ。というの、そこは別の通学団の遊び場所だったから。しかしこんなよい天気の日にとりで遊ぶよりはましだったのだ、いったのである。がそこにも、丈の高い注三はげいとうが五六本、かつと秋日にはえて鐘撞堂の下に立っているばかりで、犬の子一ぴきいなかった。

まさか医者の家へなんか集まっていることもあるまいが、ともかくのぞいてみようと思つて、黄色い葉のまじった豆畠のあいだを、徳一君の家の方へやっていった。その途中、ほし草のつみあげてあるそばへ兵太郎君にひょっこり出会つたのである。

兵太郎君はみんなから3ほら兵とあだなをつけられていたが、まったくそうだった。こんな鰻をつかんだといつて両方の手の指で天びん棒ほどの太さをしてみせるので、ほんとうかと思つていってみると、筆ぐらいの注四めそきんが、井戸ばたの黒いかめの底にしずんでい

るというふうである。(中略)また兵太郎君は音痴で、君が代もろくろく歌えなかつたが、いつこうそんなことは気にせず、みんなが声をそろえて軍艦マーチをやっていると、すぐショウワするので、みんなは調子が変わって、やめてしまふのであつた。だが、わる気はないのでみんなにきらわれてはいない。ときどき鼻をすこし右にまげるようにして、きゅつと音をたててすいあげるのと、笑うとき床の上だろが、道の上だろが、4ところ()下にくるくるせがあつた。タイソウのとき、久助君のすぐ前なので、久助君は彼の頭のうしろ側にいくつ、どんな形の、はげがあるかをよく知っている。

兵太郎君は、てぶらで変にうかぬ顔をしていた。

「みんなどこにいったか知らんかア。」と久助君がきいた。

「知らんげや。」

と兵太郎君が答えた。そんなことなんかどうでもいいという顔をしている。丸太棒のはしを大工さんがのみで、ちよつちよとほつてできたようなその顔を、久助君はまちかにつくづくとみた。

「徳一がれにいやひんかア。」

と、久助君がまたきいた。

「いやひんだらア。」

と、兵太郎君が答えた。赤とんぼが兵太郎君のうしろを通つていつて、ほし草にとまつた。そのはねが陽の光をうけてきらりと光つた。

「いつてみよかよオ。」

と、久助君がじれつたそうにいった。

「ううん。」

と兵太郎君は5なまへんじをした。

「なア、いこうかよオ。」

と、久助君はうながした。

「んでも、徳やん、さつきおつ母ンといつしよに、半田の方へいきよつたぞ。」

と、兵太郎君はいつて、強いかおりをはなっているほし草のところ

に近づき、なかばころがるようにもたれかかつた。
久助君は、徳一君のところにも仲間たちはいないことがわかつて、がつかりした。が兵太郎君の動作をみたら、きゆうに、ここで兵太郎君とふたりきりで遊ぼう、それでもじゆうぶんおもしろいという気がわいてきた。ほし草のつんであるところとか、注五藁積のならんでいるところは、子どもにはひじょうにたくさんさんの楽しみをあたえてくれるものだ。そこで久助君も兵太郎君のそばへいつて、自分のからだを、ゴムまりのようにほし草に向かつて投げつけた。6ほし草はふわりとやわらかに温かく久助君をうけとつた。とたんに、ひちひちと音をたてて、ぱつたが頭の上から豆畠の方へ飛んでいった。



久助君は、頭や耳に草のすじがかかったが、とうとうしなかった。ほし草の山は昼間じゅう太陽に温められていたので、そこにもたれかかっていると、お母さんのふところにだかれていたじぶんを憶い出させるようなぬくとさだった。久助君は猫のよう^{ねこ}にくるいたい衝動^{しょうどう}が体の中にうずうずするのを感じた。

「兵タン、相撲^{すもう}とうるかやア。」

と、久助君はいった。

「やだ。昨日相撲^{すもう}しとって、そでちぎって家でしかられたもん。」

と、兵太郎君が答える。そしてひざを貧乏^{びんぼう}ゆるぎさせながら、あおむけに空をみている。

「んじゃ、かえるたびやるかア。」

と、久助君がいう。

「あげなもなおもしろかねえ。」

と、兵太郎君は一言のもとにはねつけて、鼻をきゅつと鳴らす。

久助君はしばらくだまっていたが、ものたりなくてしようがない。

7 ころころと兵太郎君の方へころがり近づいていって、草の先を、あおむいている兵太郎君の耳の中へ入れようとした。

兵太郎君はほらふきでひょうきんで、人をよく笑わせるが、こういう種類のからかいはあまりこのまない。自尊心がきずつけられるからだ。

「やめよオッ。」

と、兵太郎君がどなった。

兵太郎君がおこつて久助君に向かつてくれば、それは久助君のぞむところだった。

「あんまり耳くそがたまつとるで、ちよつと掃除^{そうじ}してやらア。」

といって、久助君はまた草の先で、兵太郎君の頭にぺしやんとはりついた耳をくすぐる。

兵太郎君はおこっているつもりであつたが、くすぐったいのでつぜんひあつというような声をあげて笑いだした。そして久助君の方にぶつかってきた。

そこでふたりは、おたがいが8 猫の子のよう^{ねこ}なものになつてしまったことを感じた。それからふたりは、ほし草にくるまりながら、上になり下になりしてくるいはじめた。

しばらくのあいだ久助君は、冗談^{じょうだん}のつもりでくるつていた。相手もそのつもりでやっていることだと思つていた。ところが、そのうちに、久助君は一つの疑問にとらわれた。どうも相手は本気になつてやっているらしい。久助君を下からはねのけるときに久助君の胸をついたが、どうも冗談半分の争いの場合の力^{ちから}の入れかたとはちがつている。また久助君を上からおさえつけるときの、相手のやせたうでがぶるぶるとふるえている。冗談半分ならそんなことはないはずである。

相手が真剣^{しんけん}なら、こちらも真剣にならなきゃいけない、と久助君はそのつもりになつて、一生懸命^{いっしょうけんめい}にやりだしたが、そうするうちにまも

なくまたつぎの疑問がわいてきた。やはり兵太郎君は冗談半分と心得てくるっているらしい。久助君の手が、あやまって相手のわきの下から熱っぽいところにもぐりこんだとき、兵太郎君はククツツと笑つたからである。

相手が冗談でやっているのなら、こちらだけ真剣でやっているのは男らしくないことなので、こちらもそのつもりになろうと思つていて、まもなくまた前の疑問が頭をもたげる。

9 二つの疑問が交互^{こうご}にあらわれたり消えたりしたが、ふたりはともかくくるいつづけた。

久助君は顔をほし草におしつけられて、ほし草をくわえたり、ほし草があるつもりでひっくり返つたところにほし草がなくて、頭をじかに地べたにぶつけ、じーんと頭中が鳴りわたって、熱いなみだがうかんだりした。

また、しつかりと、複雑に、手足を相手の手足にからませているときは、自分と相手の足の区別などはつきりつかないので、相手の足をおさえつけたつもりで、自分のもう一方の足をおさえつけたりしていることもあった。

とつくみ合いは夕方までつづいた。帯はゆるみ、着物はだらしなくなつてしまい、じつとり汗^{あせ}ばんだ。

何度目かに久助君が上になつて兵太郎君をおさえつけたら、もう兵太郎君は抵抗^{ていこう}しなかった。ふたりはしいんとなつてしまった。二町ばかりはなれた路^{みち}を通るらしい車の輪の音がからからと聞こえてきた。

それがはじめて聞いたこの世の物音のように感じられた。その音はもう夕方になつたということ^{こと}を久助君にしらせた。

久助君はふいとさびしくなつた。くるいすぎたあとに、いつも感じるさびしさである。もうやめようと思つた。だがもしこれで起^たちあがつて、兵太郎君がベソをかいていたら、どんなにやりきれぬだろうと

いうことを、久助君は痛切^{つうせつ}に感じた。おかしいことに、とつくみ合いのあいだじゅう、久助君はいっぺんも相手の顔をみなかった。いまこ

うして相手をおさえていながらも、自分の顔は相手の胸^{むね}の横にすりつけて下を向いているので、やはり相手の顔はみていないのである。

兵太郎君は身動きもせず、じつとしている。かなり早い呼吸が久助君の顔につたってくる。兵太郎君はいったい何を考^{かんが}えているのだろう。

久助君はちよつと手をゆるめてみた。だが相手はもうその虚^{きょ}に乗じてはこない。久助君は手をはなしてしまった。それでも相手は立ちなおろうとしない。そこで久助君はついに立ちあがつた。すると兵太郎君もむつくりと起きあがつた。

兵太郎君は久助君のすぐ前に立つと、何もいわないで地平線のあたりをややしばらくながめていた。なんともいえないさびしそうなまなざしで。

久助君はびっくりした。久助君のまえに立っているのは、兵太郎君ではない、みたこともない、さびしい顔つきの少年である。



なんということか。兵太郎君だと思いこんで、こんな知らない少年と、じぶんは、半日くるつていたのである。

10 久助君は世界が（ ）ように感じた。そしてぼけんとしていた。

いったい、これはだれだろう。じぶんが半日くるつていたこの見知らぬ少年は。……

なんだ、やはり兵太郎君じゃないか。やっぱり相手は、ひごろの仲間の兵太郎君だった。

そうわかって久助君はほっとした。

だが、それからの久助君はこう思うようになった。——わたしがよく知っている人間でも、ときにはまるで知らない人間になってしまうことがあるものだ。そして、わたしがよく知っているのがほんとう

のその人なのか、わたしの知らないのがほんとうのその人なのか、わかったもんじゃない、と。そしてこれは、久助君にとって、一つの新しい悲しみであった。

(新美南吉「久助君の話」『新美南吉童話集』より)

【注】

- 1 三町 ……一町は約一〇九メートル
- 2 夜学校 ……夜に授業を行う学校
- 3 はげいとう ……ヒユ科の一年草 高さが一、二メートルになる
- 4 めそきん ……鰻の稚魚 ちぎょ
- 5 藁積 ……藁を高く積み重ねたもの

問一 本文中の太字のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 1 いきこんで の、ここでの意味と同じものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア おどろいて イ よろこんで ウ あせつて エ はりきつて

問三 2 森はしんとしていってうまい返事をしない とありますが、

(1) これは、どういうことですか。もつともよくあてはまるものを、次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

- ア 風が吹いていないので物音が聞こえないということ。 イ 森の方に向かって呼びかけたのに返事がないということ。
ウ 友だちの声が森の方から聞こえてこないということ。 エ 久助君に見つからないように友だちが隠れていたということ。

(2) この文と同じ表現の工夫が用いられている文として、もつともよくあてはまるものを、次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

- ア 彼はどんなときも決して不平を言わない。 イ 川はまったくひあがつてしまっている。
ウ 本がほこりをかぶって本箱の奥で泣いている。 エ 君の笑顔はまるで太陽のようだ。

問四 3 ほら兵とあだなをつけられていた とありますが、なぜ兵太郎君は「ほら兵」というあだ名をつけられていたのですか。具体例をあげて四十字以内で説明しなさい。

問五 4 ところ（ ） とありますが、（ ）に入れるのにもつともよくあてはまるものを、次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

- ア きらわず イ をえて ウ せましと エ どころ

問六 5 なまへんじ の、ここでの意味と同じものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア たのしげなへんじ イ いい加減なへんじ ウ とうとつなへんじ エ ぶつきらぼうなへんじ

問七 下の段落の中で作者の考えが述べられている一文を探し、はじめの五字をぬき出して答えなさい。

アほし草は ふわりと、
やわらかに イ温かく
ウ久助君を エうけとった

時の久助君の行動の目的は何ですか。もつともよくあてはまるものを、次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

ウ　ちよつかいを出して自分に関心をもたせる目的。

エ　草の先が耳の中に本当に入るかを確かめる目的。

8 猫の子のようなもの
とはこの場合どのようなものですか。もつともよくあてはまるものを、次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

ウ とらわれないようにかくれるもの
エ 自尊心を守るためにたたかうもの

問十一 二つの疑問とは何ですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

選り記号で答えなさい。

ア おもちや箱になった
イ うらがえしになった
ウ 踊っている
エ 近づいた

字数の指定のある問題は、句読点も一字と数えます。

——そういうことを「二座建立」という言葉で言い現している。

と、一座の建立にあり」というように記されている。

ういう意味であろうと思う。

私はお茶について**モンガイカン**であつて、通りいっぺんの知識

の芸術世界であろうと思う。

である。

写

十年ほど前、親しい仲間数人と穂高に登ったことがあるが、その時涸沢小屋で夜がふけるまでみなで自分が日ごろ考えていることについて話し合ったことがある。眠るのが惜しいような時間であった。高山に登って山小屋に居るということが、一座の者の心を特別なものにし、あとにも先にもないような心の触れ合い方をさせたのであろうと思う。

私はよく人に、山はいいですよという言い方をしますが、そういう言い方の中には、いつも十年ほど前の涸沢小屋の一夜の思い出がはいっている。あのような時間を一回でも持つことができるなら、山はいいと言わなければならぬと思う。これはたまた山と一緒に登ったということのおかげで、山小屋という特殊な空間において、一座で建立できた特別な、そう³ざらにはない団らんであったのである。それから何回か穂高に登っているが、残念ながら、そのような時間は経験していない。

金沢の旧制高校時代に、五人の仲間と日本海の砂丘の上で二時間ほど過ごしたことがある。現在の内灘町付近の砂丘ではないかと思うが、そこへ夕方着き、星がかがやき始め、海の面が暗くなったところ、そこを離れた。青春と言うと、この時のことを思い出すし、高校生時代の思い出と言うと、やはりまつ先に、この時のことを思い出す。そこでいかなる会話がかわされたか、いかなることがなされたか、今はもうすっかり忘れてしまっているが、あそこはまさしく、青春の時間が、気持ちよく、音を立てて流れていたように思うのである。私たちは砂丘の上にあおむけに寝転び、星を眺め、海の音を聞き、**カンショウテキ**な寮歌をどなり、そしてお互いに友情というものを素直に、そして単純に信じていたに違いないのである。その時、そこに流れていた時間は、いま考えると、ちよつとかげがえのない、なかなか貴重なものである。五人の一座の仲間が、たまたま建立することのできた青春**ゲキ**であり、青春の時間であったのである。

新聞記者時代、昭和十八、九年のころであるが、法隆寺に取材に行き、その【注2】塔中の一つである宝珠院に泊まったことがある。春であった。朝起きると、塀の向こうの桜が満開で、その満開の桜の間から法隆寺の五重塔が見えた。庭を歩いたあと、庭に面している座敷で、当時そこに【注3】止住しておられた中川善教師とお茶を飲みながら、時局の話をした。中川師は私と同年配であり、当時高野山からそこへ留学のような形で来ておられたのではないかと思う。この場合も、いかなることが二人の話題にのつたか、はつきりとは記憶に残っていないが、妙に覚悟といったようなものが、その戦時下の春の朝の静けさの中にはあったように思う。時代は暗かったが、春は明るく、そして、そこでこれからどのような生き方をしようかというようなことが、ひどく静かな空気の中で語られたのではないかと思う。中川師が語り、私の方は聞き役であつたに違いないのであるが、中川師の語り方もよく、私の聞き方もよかつたのではないかと思う。そうでなければ、その時間の中を流れていた覚悟といったような思いが、それから三十年ほどたった現在、よみがえってくることはないだろう。

この思い出は、私にとって貴重なものである。ある意味では、戦時中の最も貴重な思い出であるかもしれない。そこには戦時下の明るい春があり、戦時下を生きていた私の青春の暗さがあり、そしてその時代だけにかわされる会話が、ひどく静かな、多少いさぎよいような形で置かれているからである。この場合は一座は中川師と私の二人である。⁴二人が建立した戦時下の特殊な交歓である。

十年ほど前のことであるが、ソ連に旅行した時、ウズベク共和国の都であるタシケントにおいて、ボロジンさんという小説家の家に招かれた。ボロジンさんはロシア人、夫人はウズベグ人、二人の間には年ごろの美人のお嬢さんと二人の息子さんがあつた。

私とボロジンさんは何の関係もなかった。私がタシケントに行つて、ここに住んでいる小説家の一人に会つてみたいと口走つただただそれだけのことで、誰かが仲に立つて、⁵ボロジンさんが、私と同行の五人を自分の家のお茶によばなければならぬことになつたのである。

私はボロジンさんが歴史小説家であるということ以外、氏について何の知識も持っていなかった。ボロジンさんの方も同様であつた。私が日本の小説家であるということ以外、何の知識も持っていないはずであつた。

私はボロジン家に出かけて行き、その応接間で、初めて一人の異国の小説家と、その家族の人たちと対面した。

応接間から食堂に導かれた。食卓はすっかり草花や果物でうまり、その間から何枚かの皿や紅茶茶碗が顔をのぞかせていた。部屋全体が異国風に、もつと正確に言えばウズベク風に飾られてあつた。

部屋の飾りつけにも気持ちが行き届いていたが、家族全部の人たちのもてなし方も心のこもつたものであつた。ボロジン氏の最初のあいさつは、

——西トルキスタンの一つの共和国に来て、その小説家に会いたいと言つた日本の小説家に心から親しみを感じ、敬意を表する。しかも同じように歴史に取材した小説を書いていると聞いて、たいへん親近感を覚える。残念なことは言葉が通じないので、充分な交歓は望めない。しかし、言葉の不自由さを、家族**総出**のサーブスでうめようと思つてゐる。

私たちはふしぎなまぶしさと【注4】酩酊の中でお茶をこちそうになつた。私たちは長い時間ボロジン家で過ごした。その間、絶えずボロジン一家の好意が降り注いでいる感じだつた。親戚の人たちも姿を現した。私たちはボロジン家訪問のあと予定を持っていたが、その予定を変更せざるを得なかつた。一家、一門総ぐるみの歓待を、途中で振り切つて、席を立つことはできなかった。

私はこれまでに、これほど好意にあふれたあたたかい歓待を受けたことはなかつたと思つた。しかし、考えてみると、これだけ歓待を受けなければならぬ理由もなかつたし、ボロジン氏側に立つて言えば、これだけ歓待しなければならぬ理由もなかつた。もしそこに何かがあるとすれ

折、もう一度ボロジン氏の家を訪ねている。その時は初めからボロジン氏の方にも、私たちの方にも、一座建立の条件がそろつていた。私たち

は氏の家で楽しい団らんの時間を過ごした。

最近、ボロジン氏が今年七月亡くなられたことを、人伝ひとづてに聞いて愕然がくぜん

とした。美しく、やさしく、おおらかな心が一つ、地球上から消えた思
いである。

（井上靖「一座建立」『穂高の月』より）

【注】

1 和敬静寂
・ ・ ・ 茶道で重んじている考え

2 塔中
・ ・ ・ 本寺の境内にある小さい寺
けいだい

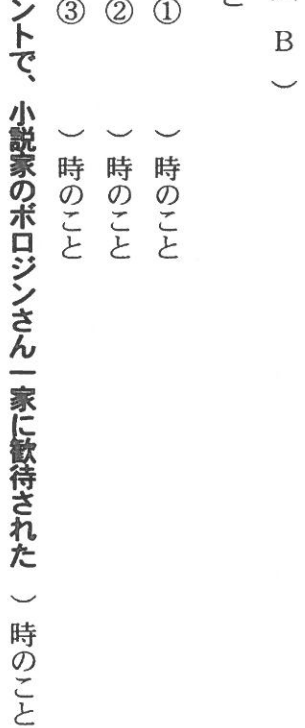
3 止住
・ ・ ・ 住むこと

4 酩酊
・ ・ ・ ひどく酒にようつこと

と思いますが、（ ）に入れるのにもっともよくあては

12

生み出されたものであるという違いがあるだけであるとありますが、
 ① ② ③ は傍線部2より後の部分から、本文中の言葉



ら一つ選び記号で答えなさい。

たたかい

問五 4 二人が建立した戦時下の特殊な交歓である。とありますが、これはどのような出来事を指していますか。もつともよくあてはまるものを、次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

- ア 中川師と私が、戦争が終結した後で、互いのこれからの生活についての希望を分かち合ったこと。
イ 中川師と私が、戦争で死ぬかもしれない思いながら、時局について興奮して議論し合ったこと。
ウ 中川師と私が、戦争で明日死ぬかもわからないのに、静かにこれからの生き方を語り合ったこと。
エ 中川師と私が、戦争中お互いの悩みや不安について、正直に打ち明けてはげまし合ったこと。

問六 5 ボロジンさんが、私と同行の五人を自分の家のお茶によはなければならぬことになったのである。とありますが、ここから読み取れる「私」の気持ちとして、もつともよくあてはまるものを、次のア～エの中から選び記号で答えなさい。

- ア 申し訳なく思う気持ち イ 光榮に思う気持ち ウ 不満に思う気持ち エ 楽しみに思う気持ち

問七 ※ にもつともよくあてはまる言葉を本文中から漢字三文字でぬき出して答えなさい。

問八 6 まさしく異国における一座建立と言うほかはない。とありますが、あなたはどのような出来事が「一座建立」であると考えますか。具体的な例をあげて、なぜそれが「一座建立」であると考えなのか説明しなさい。具体例は、自分の体験であってもなくてもかまいません。

具体例	
理由	

